

# 日英語・発想の基本型

——英語の心と日本語の心——

Four Contrastive Archetypes of Thought Between English and Japanese

——Masculinity in English and Femininity in Japanese——

石 川 衛 三

## 〈目 次〉 はじめに

- A 自律的・能動型（英）——他律的・受動型（日）
  - B 肯定的・積極型（英）——否定的・消極型（日）
  - C 客観的・分析型（英）——主観的・省略型（日）
  - D 人格的・人間中心型（英）——非人格的・環境依存型（日）
- むすび

## はじめに

以下、四項の定式（ABCD）に集約ないし還元される〈日英語・発想の原型（アーキタイプス）〉は、アメリカ映画を中心とする外国映画（40年代～70年代）の台詞（せりふ）の解析作業を通じて得られたものであるが、そこに浮き彫りになった「英語」と「日本語」両者の、〈個性〉と〈対照的なメンタリティ〉のコントラストは、まことに興味深いものがあり、注目に値すると思われる。

- A 自律的・能動型（英）———他律的・受動型（日）
- B 肯定的・積極型（英）———否定的・消極型（日）
- C 客観的・分析型（英）———主観的・省略型（日）
- D 人格的・人間中心型（英）——非人格的・環境依存型（日）

## A 自律的・能動型（英）——他律的・受動型（日）

以下に見るいくつかの例文は、映画にあらわれた「せりふ」のごく一部であるが、そこには〈日本的な（オノズカラ）「ナル」ないし「アル」〉と〈西洋的な「スル」〉の論理ないし発想のコントラストが、鮮やかに言語的に表出されていて興味が尽きない。

### A-1

艦長 「あと3分で砲火を開く、弾丸を込め。」

ウォルト「おーい、き、きいてくれ、おーい、き、きいてくれ、ダメだよ……そんな事すれば戦争になるかも知れんのがわからんのか？ そんな事してはダメだ。」

Captain : (in Russian) In three minutes I will open fire. Load the guns.

Walt : Hey, li-listen. Hey, li-listen, you, can't... Don't you realize you could start a war? You can't do that.

[アメリカ上陸作戦 (*The Russians Are Coming, The Russians Are Coming*), 1966 年, アメリカ]

A-2

モンゴ「第二の理由は？」

大佐 「第二か、第二の理由は、私と組まんと君の敵は 15 人になる。  
忘れるな、私もゲームは投げていないぞ…」

Mongo : Second reason ?

Colonel : Second reason... The second reason is you could make it fifteen to one. Don't forget, I want to play in this game, too...

[夕陽のガンマン (*For a Few Dollars More*), 1966 年, イタリア]

A-3

ジム 「カス、あいつらをどうするつもりだ？」

シルバー「巡回判事に渡すさ。2 週間後に来る。」

ジム 「荒立てん方がいいぜ。厄介なことになるぞ。」

Jim : Cass, what do you figure on doing with those two fellows ?

Silver : Take'em over to the circuit judge. He's due in a couple of weeks.

Jim : Maybe we ought to take it easy, Cass. This is just asking for trouble.

[誇り高き男 (*The Proud Ones*), 1956 年, アメリカ]

A-4

ネリー 「ポールが今朝、家を出ましたの。」

コンスタンス「出てどこへ？」

ネリー 「わかりません。この町を出て何かになりたいんですって、工場で働いてばかりいても仕様がなから。世間を見たいんですって。」

Neille : Paul left this morning.

Constance : Left for where ?

Neille : I don't know. He says he wants to get out of this town and make something of himself, instead of working all the time at the mill. He wants to see the world.

〔青春物語 (*Peyton Place*), 1957 年, アメリカ〕

#### A-5

スウェイン「しかし、君、ソートンさんは校長になる権利があるよ。一生をこの町に捧げたんだからね。我々は少なくともそれを認めてやらなくちゃ。」

Swain : But Harrington, Elsie Thornton has earned the right to be principal. She's given her life to this town. The least we can do is recognize it.

〔青春物語 (*Peyton Place*) 1957 年, アメリカ〕

このように見てくると、物事を主体的・行動的、つまり自律的にとらえる傾向の強い欧米人と対照的に、私たち日本人は物事を自然発生的に、つまり所与として受動的に受けとめる傾きが強いことがわかる。ちなみにコレに関連して、日本人の愛用する、たとえば「親ニ死ナレル」「子供ニ泣カレル」「雨ニ降ラレル」「隣リニ家ヲ建テラレタ」のような、自動詞を主とする受身法にしても、結局、人事にせよ、自然現象にせよ、自分の意向とは関係なく（つまり主観的には「一方的に」）発生した事態から影響を受けて、ひたすら受動的に迷惑を感じている（まれには、「相手ニヨロコバレタ」のように、ささやかな喜びを見出したりする）日本人の姿を映し得て妙である。そしてこの場合、それらの新しく生じた事態は、ほとんど常に「ナル」の世界の出来事として意識されている点に着目しよう。私は日本語の「レル・ラレル」の中に、みずから能動的に、自分の責任の下に（at your own risk を愛用する欧米人と比較されたい）働きかけようとはしないくせに、その影響ないし利害には、異常に敏感な「甘えん坊」の日本人の姿をかいま見る思いがしてならない。

以下、英語では能動態で表現されているのに、日本語に翻訳しようとする、どうしても〈レル・ラレル〉などの受動的表現をとらざるを得ない（つ

まり、日本語らしくならない) ような例を、いくつか見てみよう。〈スル〉の論理が優位である英語の、いわばストレートな〈自律的〉表現と、それに対応する日本語の、屈折した、被害感が消し難く漂っている〈他律的〉表現のコントラストが、そこには認められるはずである。

#### A-6

ジェフ「明りを消せ! 見られた!」

Jeff : Turn out the lights ! He's seen us !

[裏窓 (*Rear Window*), 1954 年, アメリカ]

#### A-7

マーチンズ「…ちょっと殴られただけですから。」

Crabbin : I know a very good dentist.

Martins : I don't need a dentist. Somebody hit me, that's all.

[第三の男 (*The Third Man*), 1952 年, イギリス]

#### A-8

クルツ「どうやら大した所を見られちまいしましたな。何しろ食って行かなきゃなりませんからね…」

Kurz : So you have found out my little secret. A man must live…

[第三の男 (*The Third Man*), 1952 年, イギリス]

#### A-9

ケイン「クエーカーとは決して結婚なさるな…女房に店をやらされますからね。」

Kane : But don't ever marry a Quaker… she'll have you running a store.

[真昼の決闘 (*High Noon*), 1952 年, アメリカ]

#### A-10

キャル「それで君はどうされたの?」

アブラ「父さんにお仕置されたわ。」

Cal : Well, what did they do to you ?

Abra : Oh, Dad punished me.

[エデンの東 (*East of Eden*), 1954 年, アメリカ]

A-11

ドイル 「リサはどこに連れて行かれた?」

ジェフ 「第 6 区だ。保釈金を持たせて使いをやった。」

Doyle : Where'd they take Lisa?

Jeff : Precinct Six. I sent somebody over with bail money.

[裏窓 (*Rear Window*), 1954 年, アメリカ]

A-12

「こんなものを持っていたらどんな目に合わされるか判りゃしない.」

You know what they do to you for having it.

A-13

トンプソン補導部長 「…大学院が家庭紛争に巻き込まれるのは困りますな. 深刻らしいし…」

Dean Thompson : Uh, Mr Barrett—I really don't think that this office—should enter into a uh—family quarrel. A rather distressing one at that.

[ある愛の詩 (*Love Story*), 1970 年, アメリカ]

A-14

タプマン 「君…何か乾いたものに着替えた方がいいよ。」

オー 「ええ, そうします. 大佐に報告がすんだらすぐ. さっき海から拾い上げられたばかりなんです.」 (注) この場合は利益を表す.

Tappman : You—you'd better get some dry things.

Orr : Oh I will. As soon as the Colonel is through with me. They just picked me up out of the sea.

[キャッチ 22 (*Catch 22*), 1971 年, アメリカ]

## B 肯定的・積極型（英）——否定的・消極型（日）

欧米人の能動的・積極的姿勢と日本人の受動的・消極的態度のコントラストはイエスの、

### B-1

Do to others as you would be done by. (Mat. 7:12)

という言葉と、孔子の「己ノ欲セザル所ヲ人ニ施スコトナカレ」という教えに、いみじくも端的に現れている。人間関係のあり方について、ほとんど同じことを、この二人の「人間の教師」は考えていたといってよい。しかし、その方向が反対である。「手を引っこめる」と「手を差し出す」のと、この二つの差が2000年の間に大きな差となったようである。ところで、ここで興味あることは、これらの例に象徴的に見られるように、積極的・行動的なメンタリティは**肯定的**表現を好み、逆に消極的・受動的な心的態度は**否定的**表現となって表出される傾向が認められることである。次の感動的場面のサラの絶叫をごらんいただきたい。

### B-2

アニー 「(やさしく) すぐに帰ります。一目会いたかっただけです。それだけです。で、今しあわせですか？ 青い鳥見つけたりそうですか？」

サラ・ジェーン 「私はサラ・ジェーンじゃない！ 白人なのよ！ 白人よ！（むせび泣く）これで分かった？」

アニー 「分かりましたよ。」

サラ・ジェーン 「だったらお願い、ママ帰ってよ、そして二度と来ないで、もし道路や乗物の中で、バッタリ会っても、お願いだから知らん顔をしてね。」

Annie: (gently) I'll only stay a minute. I just wanted to look at you.

That's why I came. Are you happy here, honey ? Are you finding what you really want ?

Sarah Jane : I'm somebody else ! I'm white ! White ! WHITE ! (sobs)

Does that answer you?

Annie : I guess so.

Sarah Jane : Then please, Mama, will you go ? And never do this again !

And if—by accident—we should ever pass on the street—please don't recognize me !

〔悲しみは空の彼方に (*Imitation of Life*), 1959 年, アメリカ〕

そういえば、アメリカ映画 *I Want To Live* (1958) の日本語題名は「私ハ死ニタクナイ」であったし、英国映画『007 ハ二度死ヌ』(1966) の原題名は *You Only Live Twice* であった。“Thank you” はこの国では「有り難」いのである。黒板に書いたものを「消サナイデ下サイ」は、アメリカの教室では、‘Save !’ と書かれていたし、「コノドア使用禁止」も ‘Please Use Other Door’ と肯定的かつ積極的である。そしてアメリカの戦時中（だけではないようだが）の合い言葉「真珠湾ヲ忘レルナ！」が、Remember Pearl Harbor ! であったことも未だに鮮明だ。

Remember にちなんで、彼らの常用する if I remember right が日本語で「私の記憶ニ間違イガナケレバ」と否定的に表現される背後には、人から間違いや過ちを指摘されることを恐れる非行動的で、臆病な小心翼翼たる心理が常に働いており、日本人の発想は、概して小さく、小さくなる傾きを持ち、「小利口、小金持、小器用、小細工（ただし小型自動車はヒット）」と、万事スケールが小さい。（ただ、この所、オウム真理教で日本国内も物情騒然として、大胆不敵な行動に出る向きもあり、予断を許さないものがある。）かくて「大過ナク」（つまり小功もなく）すごし得たことが、離任ないし、退官の「型通り」の挨拶とされるこの国では、ちなみに「いいわけ文化」ともいうべき自己弁護のないし否定的表現が多い。「先輩ヲサシオイテ…デスガ」「〇〇（ノ



コトバ) ジャナイデスガ…」等々。そこで外国人は「自慢ジャナイガ」「愚痴ジャナイガ」といって「自慢」をし、「グチ」をこぼすと、不思議がることになる。

アメリカ人の Take it easy! (ソウムキニナルナヨ／クヨクヨスルナヨ) とか、フランス人の C'est la vie (= ソレが人生ダ) (仕方ガナイサ), 更には Que será, será (スペイン語) (= What will be, will be) ([ナルヨウニシカナラヌ]) 等の常套句 (いずれも肯定的表現で, 対応する日本語が, それぞれ否定的ニュアンスを持つことに留意) は, 彼らの (カンタンには過失や失敗にめげぬ) 思いつめることの無い, 人生に対する肯定的態度を表白して余りある。英国人がよく口にする *Never mind* や *muddle through* にも, その一端がうかがえる, 彼らの骨太な神経ないしその本来的なオプティミズムは, 日本人のものではないであろう。

片や, その日本人が日々, 言い暮している感のある「シッカリガンバツネ／ガンバロー／ガンバラナクツチャ」等の表現には, 彼らのユトリある発想とは対照的に, 〈思いつめた, 笑いを忘れたマジメ人間の, 減点ないし失点と, 人の眼を恐れる努力主義〉, 要するに 〈狹隘・小心な主観的〉発想が濃厚である。そこには, 自分をクールに客観的に見つめる心のゆとり, つまりユーモアが一つ足りないのだ。このユーモア, つまり「客観的に眺めた自分の姿」は, 概して「局外者デナイトワカラナイ (否定的) = It takes outsiders to know (肯定的)」ものかも知れない。

以下に見る, 肯定的 (英) vs 否定的 (日) 表現のコントラストの諸相は, 同時にその背後にひそむ, 彼我のメンタリティの異質ないし対照性を鮮明に描き出す。

### B-3

マーチ「(銃をかまえて) さあ, そこ動かないで!」

March : Now, stay right there.

[女狐・(*The Fox*), 1966 年, アメリカ]

## B-4

マーチンズ 「ちょっと待って——降ろしてくれたまえ。」

キャロウェイ 「ああ、時間はあまりないぜ。」

マーチンズ 「このままじゃ発てないよ、頼む。」

キャロウェイ 「バカな事するなよ。」

Martins : Wait a minute—let me out.

Calloway : Well, there's not much time.

Martins : One can't just leave—please.

Calloway : Be sensible, Martins.

[第三の男 (*The Third Man*), 1952 年, イギリス]

## B-5

ハギンス 「ゲーリック! 一塁にいるウォリー・ピップから眼を離すなよ。君が打撃のできることは分かっている——だが守備も大切なのだ。」

Huggins : Gehrig ! I want you to keep your eye on Wally Pipp, out there on first base. I know you can hit... but fielding is important, too.

[打撃王 (*The Pride of the Yankees*), 1942 年, アメリカ]

## B-6

アナウンサー 「(テレビで) モンターグはまだつかまりません。しかし時間はどんどんきれて行きます。ああ、出ました。空中偵察隊が犯人の姿を認めました。」

Announcer : (over television) Montag is still at large. But time is running out fast. Ah ! There it is ! The Aerial Patrol has sighted the wanted man.

[華氏 451 (*Fahrenheit 451*), 1966 年, イギリス]

## B-7

シルバー 「サリー、おれは臆病者じゃないぞ!」

サリー 「臆病者? あんたのすることは自殺行為よ。馬鹿なプライド

のために命を捨てる気なの？」

シルバー「今度こそは町を出たりしないぞ!」

Silver: Sally, I'm not a coward!

Sally: Coward? This is suicide. What are you going to do—stay here and let your crazy pride kill you?

Silver: This time I'm staying!

〔誇り高き男 (*The Proud Ones*), 1956 年, アメリカ]

#### B-8

オシー「君はずっと彼女の（オッパイじゃなく）腕をさわっていたんだよ。11 分間も腕をにぎりしめてたのさ、このトンマ野郎! だから〈ライラ・ハリソンと 8 分間〉の記録はまだ破れてない。」

Oscy: You were feeling her arm. I was looking. That's what I was trying to tell you. You were squeezing an arm for eleven minutes, you schmuck! So the eight minute record with Lila Harrison still stands.

〔おもいで夏 (*The Summer of '42*), 1971 年, アメリカ]

#### B-9

キャシー「やめて! さあやめて出ていってちょうだい。あなたにも何かほかの人になる機会はあったわ。でも泥棒とか召使いにしか、あなたは生まれついていないのよ——それとも道端の乞食とかね。お恵み下さいって。自分の手で稼ぐのではなく、メソメソ泣いてみせては、その汚い手でお金をもらうのかわ。」

Cathy: Stop it! Stop it, and get out. You had your chance to be something else. But thief or servant were all you were born to be—or beggar beside a road. Begging for favors. Not earning them, but whimpering for them with your dirty hands.

〔嵐が丘 (*Wuthering Heights*), 1939 年, アメリカ]

以下の 4 例は any (任意性をあらわす) をふくむ面白い事例。たとえば

**B-10** anything can happen は「任意ノモノガ何デモ起コリ得ル」と未来に向かって、積極的・肯定的に受け取める趣きがあるのに、日本語では「そういう任意のものは特定できない」と未来に対して、いわば消極的・否定的に「及び腰」的な姿勢を示して対照的である。 **B-12** の Any direction. (方角不明) にも、いわば〈開いた〉 vs 〈閉じた〉メンタリティがうかがわれて面白い。

### B-10

エリナー 「ゲーリッグさん、あなたの最初のワールド・シリーズの為に  
(乾杯) …」

ルー 「そんな事いわんで下さい。 まだです。 ほくたちは、 もうあと  
六つの都市が待ってるんです。 何が起こるかわかりません…」

Eleanor : Well, Mr. Gehrig… to your first World Series.

Lou : Oh, don't say that, not yet. We've got six more cities waiting  
for us, and anything can happen…

[打撃王 (*The Pride of Yankees*), 1942 年, アメリカ]

### B-11

アデリーン 「みんな香港だけには住みたくないっていうけど…どうして  
かしら? 召使い一人の値段で十人の召使いがやとえるなんて所は、  
どこにもないわ。」

Adeline : Why anyone would want to live anywhere but Hong Kong—I  
can't understand. Where else in the world could you get ten servants  
for the price of one ?

[慕情 (*Love Is a Many-Splendored Thing*), 1955 年, アメリカ]

### B-12

アーサー 「行方不明の船はつきとめたか?」

カルバート 「(無線で) はい。」

アーサー 「どこだ?」

カルバート「[どこだった?] ですね。今頃は 100 マイルも先に行っているでしょう。方角不明。色も変えて、マークも変えて、旗も変えて。」

Arthur : Have you located missing vessel ?

Calvert : (over radio) I have.

Arthur : Where is it ?

Calvert : Where was it, you mean ? It could be a hundred miles away by now. Any direction. Different colors ; different marking ; different flags.

[八点鐘が鳴るとき (*When Eight Bells Toll*), 1970 年, アメリカ]

さて、今度は次例を眺めていただきたい。

### B-13

エンマ「起きてもいいといわれるまで起きてはいけません。」

Emma : You can get up when you're told you can get up.

[美女ありき (*Lady Hamilton*), 1940 年, イギリス]

このように、同じ趣旨の内容を表現しながら、それに対処する姿勢は〈積極的(英)——消極的(日)〉と対照的である。以下においては、彼らの〈未来志向的・行動的〉な積極性が言語的に肯定形をとらせ、逆に日本語では、その〈現実肯定的・非行動的〉な消極性が否定形をとらせる事例を眺めてみたい。以下の諸例を読み進むにつれて、彼我のメンタリティの異質性を痛感されるに違いない。卑近な所では「題未定」= Program to be announced などが挙げられる。

### B-14

そのネクタイはひどいね。

You badly want a new tie.

# B-15

ドイル「ジェフ、君は殺人事件の扱い方を何も知らんのだ。犯人どもの手口は巧妙を極めていて、百人もの訓練された刑事が、その解決に当たらなきゃならんほどだ。…」

Doyle : Jeff, you've got a lot to learn about homicide. Why, morons have committed murder so shrewdly that it's taken a hundred trained police minds to catch them. …

〔裏窓 (*Rear Window*), 1954 年, アメリカ]

# B-16

エディ 「だが、どうやって税関を通った？ あれだけの紙幣を。案外カサばるんだぜ。」

ヴィッキー「スイスの税関がズボラな事は有名でしょ？」

エディ 「だが一度には運べないだろう。」

Eddie : How did he get it through customs ? It's rather bulky, you know.

Vicky : The Swiss are notoriously casual about certain formalities. Air-plane luggage they hardly ever check at all.

Eddie : But he'll have to make more than one trip.

〔華麗なる賭け (*The Thomas Crown Affair*), 1968 年, アメリカ]

# B-17

サリー 「誰にだって後悔することはあるものよ。」

シルバー「おれは運がいい方かもしれん。後悔をなくす機会に恵まれているんだ。こんな事はめったにあるものじゃない。」

Sally : Everybody does things they'd like to do over.

Silver : Maybe I'm lucky. Everybody doesn't get a second chance.

〔誇り高き男 (*The Proud Ones*), 1956 年, アメリカ]

## B-18

アンナ 「これからどうするつもり？」

マーチンズ 「よく分からないんだ。」

アンナ 「無茶しないでね。キャロウェイ少佐に話さないよ。」

Anna : What are you going to do ?

Martins : I wish I knew.

Anna : Be sensible—tell Major Calloway.

[第三の男 (*The Third Man*), 1952 年, イギリス]

## B-19

ジョーディ 「そういう連中, ぼく知ってます。前にもこんな目にあったことがあるんです。そういう連中は, 天に任せるほかないです。僕らは結構やって行ってますから。ねえ, それより, パパ, ぼくが気がかりなのは, 案外分別のない連中のことですよ, パパのようなね。」

Jordy : I know those people. We've run into this before. Just leave 'em to heaven, we're doing fine. Oh, look, Papa, if I'm concerned it has to do with the people that ought to know better. Like my own father.

[ジャイアンツ (*Giants*), 1956 年, アメリカ]

## B-20

シルバー 「これからどうなる？」

医師 「すぐには分からない。緊張や刺激がいけないことはたしかだ。」

Silver : What happens from here on ?

Doctor : We'll have to wait and see. One thing for sure—any strain or excitement won't do it any good.

[誇り高き男 (*The Proud Ones*), 1956 年, アメリカ]

## B-21

ゼルダ 「サングラスをかけ, ヒゲはそってなかったけど, とにかく彼だということは分かったの。」

Zelda : He wore sunglasses and he needed a shave, but I... I recognized him anyway.

[ねえ、キスしてよ (*Kiss Me, Stupid*), 1964 年, アメリカ]

## B-22

ルイス「おれは、今まで保安官代理が足りないといい続けてきた。もし、いたら、今、こんな事態に会うことはないんだ。」

Lewis : I've been saying right along we ought to have more deputies. If we did, we wouldn't be facing this thing now.

[真昼の決闘 (*High Noon*), 1952 年, アメリカ]

## B-23

サリー「場所がせまいといったでしょ。椅子をもっとお出し。」

女の子「はい。はい。」

サリー「椅子を出せば、それだけもうかるんだからね。」

Sally : I told you we'll need more room. Get some more chairs around here.

Girl : Sure, Sally.

Sally : Every chair means more money.

[誇り高き男 (*The Proud Ones*), 1956 年, アメリカ]

## B-24

ニック「足りなきゃ, 小切手やるぞ。」

ジュリー「現金に限りますの, 悪しからず。」

Nick : If it's more, I can give you a check.

Julie : I don't take checks, dearie.

[蒼い渚 (*Go Naked In the World*), 1960 年, アメリカ]

面白いのは、B-24 の「足りナキャ」というネガティブな表現が If it's more と積極的な, demanding な表現をとっていることだ。〈足りナイ〉(なら)と〈モットホシイ〉(なら)の対比である。



さて、〈肯定的・積極型——否定的・消極型〉の対立にちなんで、一般に「アル」（肯定）ことの証明が容易であるのに対し、「ナイ」（否定）ことの証明は困難である点を指摘したい。たとえば、ある物がこの部屋に「アル」という証明は、比較的たやすい。「これ、この通り」と実証できるからだ。ところが逆に、ある物はこの部屋に「ナイ」ことを証明するとなると、話はたいへん難しいものとなってくる（予想もしない所から飛び出しかねないからだ）。筆者もロンドン大学留学中、West End の St Martin's Theatre で観客の一人となった、かの Agatha Christie の（1952 年以後の）超ロングランの演し物 *The Mousetrap* の中で、Victor Maddern 演ずる Mr Paravicini も言っている。

Paravicini : ... Can I prove to you or to him or to our dogged Sergeant that I am *not* a homicidal maniac ? So difficult to prove a negative. And suppose that instead I am really... と。

ここで一つ考えられることは、以上の視点がひょっとすると、われわれが実例に即して観察してきた「肯定的表現」と「積極性」の結びつき、及び「否定的表現」と「消極性」の結びつき、を説明するのではあるまいか、ということである。つまり（断定は避けたいが）話者が意識すると、しないにかかわらず、いわば深層心理的に、この〈肯定的命題の「証明可能性」〉が、〈積極的態度〉をとらせる原動力となり、逆に、〈否定的命題の「証明困難性」〉が〈消極的態度〉を結果的に招来している、と言えるのではなかろうか。

## C 客観的・分析型（英）——主観的・省略型（日）

標題の〈発想パターン〉の対立については、まず、次の二例をごらんいただきたい。

### C-1

カルバート 「（顔をしかめる）おい、いてえぞ、気をつけてくれ、あ

の船の悪党にやられたよりいてえ。」

ハンスレット「すまん。情報部では応急手当を教えてくださいんもんだから…」

Calvert : (winces) God almighty, be careful, you're hurting me more than that bastard on the ship !

Hunslett : Sorry. We didn't learn first aid in Intelligence.

[八点鐘が鳴るとき (*When Eight Bells Toll*), 1970 年, アメリカ]

## C-2

(ジャンヌを、ホテルの支配人 Peter が自分のアパートに案内する。彼女はシュミーズ姿になる)

ジャンヌ「あなたも上着をぬいで。 はずかしいわ。」

Jeanne : Take off your jacket. You embarrass me.

[ホテル (*Hotel*), 1967 年, アメリカ]

上例の「イタイ」「ハズカシイ」に見られるように、日本語は一般的に自己表出的・主観的な表現が多く、かつ、それは環境ないし状況依存的で五つの W (イツ、ドコデ、ダレガ…) もあらばこそ、はなはだしく「省略型」である。片や英語は「オ前ハオレニ苦痛ヲ与エツツアル」「アナタハ私ヲキマリ悪ガラセル」ときわめて〈客観的にして分析的〉、自己をも対象化 (客観化) したさめた表現で、第三者の眼にも明らかな体 (てい) の explicit で precise, つまり elaborate な、いわば「必要にして十分な情報」を盛り込んだ〈5W 的情報型〉ないし〈分析的〉表現といえよう。「オレはウナギだ」(料理店で) に戯画化される、省略型日本語とは大きな違いである。「じゃーね」と good bye (= God be with you) [日英語ともに同じ 2 音節句であるのに、である] に盛られる情報量の隔絶に注目しよう。なお、引き続き以下の例を参照されたい。

## C-3

マリア 「私といて嬉しい (私ハアナタヲヨロコバスデショーカー)? い  
つも私を、あなたと一緒に連れて行ってくれる?」

ジョーダン 「君が、ぼくから逃げて行かない限りはね。」

Maria: Do I please you? Will you always take me with you?

Jordan: Unless you run away from me.

[誰が為に鐘は鳴る (*For Whom the Bell Tolls*), 1943 年, アメリカ]

## C-4

「間違いないいんでしょうな (私ハアナタノコトバヲ正確ニ聞イテイルデシ  
ョーカー) …」 (トラック運転手になりたい, という女性に対して)

Am I hearing you correctly, Miss Jones? You want to be a truck  
driver?

[R. Freeman: *One Minute Dialogs* (Asahi Press)]

ではいったい、何が、以上のような彼我の言語形式のコントラストをもた  
らしたのであろうか。おそらく、このような状況の裏には、次のような事情  
が存在する。

もともと西欧人にとって本来の「対話」とは、日本におけるような、気の  
合った者同士のレクリエーション (「毛づくろい」ないし「おしゃべり」) では  
ない。それは、むしろ (日本人なら口をきこうともしない) 気心の知れない者  
同士の、平和共存のための、言わば真剣勝負なのであった。従ってそこで  
は、自己の意志・主張を、相手にいかに直<sup>ちよく</sup>截<sup>せつ</sup>・有効に理解させるか、が第  
一の要諦となる。一方的な自己主張 (も時には有効であろうが) は、交渉を破  
綻させる以外の何物でもない。自らを客観化し、可能な限り相手のタームズ  
(terms) で、自己を過不足なく分析・展開せねばならぬ。彼らの洗練され、  
効果的 (または大げさ) な表情・身振りも、その重要な一部をなす。「沈黙」  
は、敗北ないし、(潜在的に) 暴力の開始を意味する。トコトン話しあった挙  
句、相手の言い分が自己否定に連なる時、彼らは、無言の物理的ケンカまた

は戦争（相手の否定）を始めるのである。

ヨーロッパ的「対話」とは、原理的に「西欧中世・都市<sup>シトワイアン</sup>」的な行為と言える。やや図式的にいえば、対面性の論理に支えられた農耕民の場面、それは、お互い気心の知れた「話さなくてもわかる」、状況依存的・省略的言語が機能する舞台である。他方、その、いわば暖い女性的情感の世界から、痛みを以て自らを切り離し（集団埋没型日本人にとっては困難なことだが）、潜在的な敵たる相手と切り結び、渡り合う明日に生きる理念的な戦士は、自己を最終的に生かすため、やがて、単なる自己主張に止どまらず、客観性・普遍性（正義と公正）をも志向するに至った。このような客観的・男性的原理に立脚する「ヨーロッパ都市」市民の、言語による闘争が（そのルーツを辿れば）、ほかならぬ欧米流の「対話」（ダイアログ）なのである。さきに見た A や B の発想形式（自律的・肯定的 etc）も、このような文脈において了解されよう。なお、このヨーロッパ的対話が胚胎し、展開される「話さなくてはわからぬ」世界ないし場面では、原則的に、「話されたこと」のみが意味をもち、ソレ以上ないしソレ以外には、（日本人が期待するように）忖度<sup>そんたく</sup>ないし推察されることがないという点は注意されてよい。欧米人にとって、発音しない人間、発声されない意志は、社会的にゼロに等しい。沈黙は必ずしも金ではない、のである。

ところで、前出 Christie の *Mousetrap* に次のような「せりふ」がある。

#### C-5

Giles (furious) : You keep away from my wife, Wren. She's not going to be the next victim.

日本語なら、さしずめ「（妻に近付くことは許さん！）妻を次の犠牲者にはさせないぞ」とでもするところ。日本的〈主観的〉表現つまり「主観（I）の直接的表出」の欠落したこの種の表現は、英語に意外と多い。以下、その諸相をいくつか眺めたいが、この種の、主観を、思いきり後退ないし抑えた

〈言い回し〉によって、逆説的に「ソノヨウナ事態ガ、結果的ニ招来・実現サレルコトニナロー」という、話者のなみなみならぬ決意がむしろ強調されて、有効かつ迫力あるレトリックの一つと言えよう。たとえば、次例にも見るように、

## C-6

「君に害が及ぶようなことはしない。」

No harm will come to you.

一見〈ナル〉の論理に似た印象を与えるが、これを直訳すると、日本語にならないことから立証されるように、その表層表現の内側に、それとは裏腹に、話し手のしたたかな意志が裏打ちされている点で、日本語のそれとは似て非なる、異質な発想形式の一つである。

## C-7

ローズマリー「もう絶対に（彼らを）入れないわ、赤ん坊にも近づけない。」

Rosemary : They're not setting foot in this apartment ever again. And they're not coming within fifty feet of the baby.

[ローズマリーの赤ちゃん (*Rosemary's Baby*), 1968 年, アメリカ]

## C-8

コード 「ところで、女が自殺する気になるとは、おまえ、何をしたのだ？」

ジョナス「別に変わったことはしないよ。結婚式はやらないっていっただけさ。」

Cord : Well, what did you do that made the girl want to take her life ?

Jonas : Very ordinary thing. I told her there wouldn't be any wedding.

[大いなる野望 (*The Carpetbaggers*), 1964 年, アメリカ]

## C-9

アンセルモ「あの歩哨は…おれの村の男らしい。とっても若いんだ。彼も殺さなきゃならないかね？」

Anselmo : That sentry... he looks like a man from my village. He's very young. He must die ?

〔誰が為に鐘は鳴る (*For Whom the Bell Tolls*), 1943 年, アメリカ]

## C-10

兵士 「こんな所で恋人を待たしておくもんじゃないよ、坊や。」

キャル「ええ、二度としませんよ。」

兵士 「それがいい、この辺には変な野郎が大勢いるからな。ご免よ、お嬢さん。」

Soldier : This is a lousy place to keep your girl friend waiting for you, kid.

Cal : Sir, it won't happen.

Soldier : Er, I hope not. Lots of lousy characters around here. Sorry, miss...

〔エデンの東 (*East of Eden*), 1954 年, アメリカ]

## C-11

シルバー「何か話したいことでもあるのかね？」

ジム 「今でなくてもいいんだ。(上着を取る) じゃお休み、カスさん。」

Silver : Something on your mind ?

Jim : It'll keep. Good night, Cass.

〔誇り高き男 (*The Proud Ones*), 1956 年, アメリカ]

## C-12

キャシー 「汚ない子ね！」

アーンショウ「いや、そんなことはない。何とハシタないことをいうのだ、キャシー。 エレン、この子の体をゴシゴシ洗ってやったら、ヒ

ンドレイの部屋に案内してやりなさい。 この子をそこで寝かせることにしよう…」

Cathy : He's dirty !

Earnshaw : Oh, no. Don't make me ashamed of you, Cathy... when he's been scrubbed, Ellen, show him Hindley's room. He'll sleep there...

〔嵐が丘 (*Wuthering Hights*), 1939 年, アメリカ]

### C-13

マギー「サンドラ、あなた覚えていらっしゃる？ フィラデルフィアで、私がピート宛に親展と書いた手紙をおいてゆきたいなら、開封せずに渡して上げる、なんて皮肉におっしゃったことを？」

Maggie : Sandra, do you remember telling me sarcastically in Philadelphia that if I wished to leave Pete a letter and marked it personal he'd receive it unopened ?

〔偉大な嘘 (*The Great Lie*), 1941 年, アメリカ]

### C-14

医師 「この子は少し目方が増えたようだな。」

スーイン「石けん（衛生）と愛情が、大へんな差違をもたらすのです。この子は、退院してから私が面倒を見ます。」

Dr. Keith : I think she's put on a bit of weight.

Suyin : Soap and affection make a world of difference. She's being discharged in my care.

〔慕情 (*Love Is a Many-Splendored Thing*), 1955 年, アメリカ]

### C-15

マリア「…ああ。ロベルト。あたし…あたしはキスの仕方を知らないのよ。知ってたらするのだけれど。 鼻はどこにやるの？（笑う）あたしはいつも、 鼻をどこにやるのかしらと思っていたの。…鼻は、じゃまにならないのね、あたし、いつも鼻はじゃまになるんだと思ったのよ。」

Maria : Oh, Roberts, I... I don't know how to kiss or I would kiss you.

Where do the noses go ? (laughs) Always I've wondered where the noses would go ... They're not in the way, are they ? I always thought they would be in the way.

〔誰が為に鐘は鳴る (*For Whom the Bell Tolls*), 1943 年, アメリカ〕

## C-16

レスゲート「で、いつ(殺人を)やるんだ？」

トニー 「明日の晩だ。」

レスゲート「明日！ とてもだめだ！ とっくりと考えてみなくちゃならんもの。」

Lesgate : When would this take place?

Tony : Tomorrow night.

Lesgate : Tomorrow ! Not a chance ! I've got to think this over.

〔ダイヤル M を廻せ (*Dial M for Murder*), 1954 年, アメリカ〕

## C-17

ジェフ「トランクを運ぶ前に, ドイルが来ると思ったのに…でなきゃ, 警察に訴えたところだ. これで手掛りがなくなる。」

Jeff : I thought Doyle would be here by the time the trunk went or I'd have called the police. Now we're going to lose it.

〔裏窓 (*Rear Window*), 1954 年, アメリカ〕

## C-18

「それは承認できぬ.」

'That won't pass.'

次に、以上の〈脱主観的表現〉ないし〈客観的表現〉の一種として、相手の立場に視点をおいた、説得力をもつ、英語に一般的な（しかし日本語には、なじまない）発想・表現の具体例をみてみよう。（You win. (負けたよ) や You're welcome. (どういたしまして) の類）



C-19

ダイアン 「まあ、あなた——また、お会いできてとてもうれしいわ！

(封筒を彼のポケットに入れる) 渡したわよ！」

チェスター 「分かってる！」

ダイアン 「なくしちゃ駄目よ！」

Diane : Oh, darling—it's so wonderful to see you again !... (puts envelope into his pocket) You've got it.

Chester : I know it !

Diane : Don't lose it !

[ミサイル珍道中 (*The Road to Hong Kong*), 1961 年, アメリカ]

C-20

ボンド 「どこにある？」

ティファニー 「それより、運ぶ心配だけしなさい。」

ボンド 「量は？」

ティファニー 「5 万カラット。」

ボンド 「142 カラットが 1 オンスだから、大変な荷物だな。こいつは、むずかしい。」

ティファニー 「だから、運び賃が 5 万ドルなのよ。」

Bond : Where are they now ?

Tiffany : That's not your problem. Your problem is getting them in.

Bond : How much is there ?

Tiffany : Fifty thousand carats.

Bond : Well, at 142 carats an ounce, that's an awful lot of ice. That won't be easy.

Tiffany : That's why you're being paid fifty grand...

[007/ダイヤモンドは永遠に (*Diamonds Are Forever*), 1971 年, イギリス]

C-21

キャル 「君は真実を見つめることができるか？ 一度だけでも。来給

え、一度だけ真実を見せてやる。見られるだろう？ 来給え。さ、見せてやるものがある。時間はとらせない。」

Cal : Can you look at the truth ? Just once, huh ? Come on, you can look at the truth just once. Can't you ? Huh ? Come on. Come on, I want to show you something. It won't take very long.

〔エデンの東 (*East of Eden*), 1954 年, アメリカ]

## C-22

ドライスデル「アダム、連絡できる電話番号を知らせといてくれ。操縦士が足らんのでね。忘れないでくれよ！ 今に始まったことじゃないんだからな。市内に乗り込むんだろう、アダム？ (jockey = pilot)」

Drysdale : Adam, leave a number where you can be reached. I am short of jockeys. And do not forget ! It has happened before. Want a ride into the city, Adam ?

〔ニューヨークの休日 (*Sunday in New York*), 1963 年, アメリカ]

## C-23

マイロ 「M&M 産業のためになることは、お国のためになることだと思います。」

カスカー ト「私たちは全面的に協力しよう, マイロ。」

Milo : I feel, sir, that what will be good for M and M Enterprises will be good for the country.

Cathcart : You'll have our full cooperation, Milo.

〔キャッチ 22 (*Catch 22*), 1971 年, アメリカ]

## C-24

ジェフ「彼の細君は病人だったぜ。」

ドイル「そうだって話だったな。さてジェフ、ぼくは、もう失礼するよ。本署への報告をひかえとくでしょう。君たちを笑い者にする手はないからな。」

Jeff : His wife was sick in bed.

Doyle : Yeah, so you told me. Well, Jeff, I've got to run along. I wouldn't report this to the Department, but let me poke into it a little on my own. No sense in your getting a lot of ridiculous publicity.

〔裏窓 (Rear Window), 1954 年, アメリカ〕

## C-25

テッド「立ちな…ここで何をしてるんだ？ 一体君は誰だ？」

レオ 「おじさんを知ってるよ…会ってるんだ。」

テッド「会ったって？」

レオ 「水泳場で…泳いでいたでしょ…ほくは、ほかの人たちと行ったんです。」

Ted : Get up… what are you doing here ? Who are you anyway ?

Leo : I know you… We've met.

Ted : Met ?

Leo : At the bathing place… You were bathing… I came with the others.

〔恋 (The Go-Between), 1971 年, イギリス〕

なお、以上の「相手 (you) の立場に視点をのけた」表現は、おのずと次節の〈人間中心主義〉へと、その道をめずる。

## D 人格的・人間中心型(英)——非人格的・環境依存型(日)

周知の如く、ヨーロッパ系言語における人称代名詞は、日本語と比べてきわめて少数である。たとえば英語 (単数) の場合、一人称 (I), 二人称 (you), 三人称 (he, she, 時に it) にすぎないのに対し、日本語のそれは、一人称のみを取り上げても「ワタシ、ボク、オレ／手前、アッチ、オラ／…」と多彩にして豊富である。ところが、これら人称代名詞の使用頻度という点では、とたんに、その比を見事に逆転する。西洋では日本人の眼からは、「言わずもがな」と思える時でも、いちいち、ていねいに自他の別、つ

まり〔the person speaking (1), spoken to (2), or spoken of (3)〕の区別を「ことあげ」するのに対して、日本語はその点きわめて淡泊で、おしなべてコトバは、必要な未知の情報だけに止どめ、話し手と相手の間で了解ずみの事は、どんどん省略してしまう。だから極端な場合、「行コウト言ッタンダケレドモ、イヤダト言ッタモンダカラ、怒ッチャッテ、帰ッテキタンダ」といった表現も、不可能ではない。ここには、実は四人（話者をふくめて）の登場人物がいるのである。「A が行こうと言ったんだけど、B がいやだと言ったものだから、C が怒っちゃって、みんな帰ってきたんだ」〔大野晋氏（日本語学）の「例」〕

日本語と西洋語との間に見られる「人称代名詞の使用頻度」についての、この顕著なコントラストも、つまり所、〈日本民族が歴史的に、外的な風圧・抑圧にさらされることなく、奇跡的にも（温室的に）保持しえた、その『イエ・ムラの・人間関係』に支えられた（又、支えもした）〉、外ならぬ日本語が、「言わなくてもわかる」〈環境依存型〉言語であり続けたことによると思われる。さきに見た「ワタシ、ボク、オレ、…」の如く、日本語による自己規定が、相手次第、つまり相対的・対象依存的であるため、多数の variants を持ちうるのに対して、多民族間の葛藤<sup>あつれき</sup>、軋轢、支配・被支配の歴史をもつ彼の地では、そして、そこで丁々発止と切り結ばれる「言語による闘争」においては、「ワレ（I）とナンジ（you）の峻別」つまり「能動的主体と受動的客体の区別」はミニマム・不可欠の前提であったと考えられる。ソコで必然化される（相対的ならぬ）絶対的自己規定（ワレは常に I）と、ソコに展開される‘I と you’なる「抽象的シンボル」の、瞬時にして交互に入れかわる「間断なき使用」（これが、総じてヨーロッパ語の人称代名詞が 1 音節語たるゆえんである。ひんぱんに使えば、摩滅して小さくなる道理である）は、その使用者に「対等なる自主性」ないし「個なる意識」を持つことを、（因となり果となりつつ）招来し、強制し、そして結果せずにはおかなかったと思われる。

「個人」は正に、欧米の世界においては〈人間関係の究極的な単位（アルファでオメガ）〉であり、すべてが、ここに還元され、ここから出発する。キ

リスト教によれば、靈魂をもつもののみが、神を信じ、救済される可能性をもつのであった。こうして彼らは、「人間」と「動物」を峻別し、肉食を合理化したのであったが、それも、彼ら一流の〈人間中心主義〉の一つの現れに外ならない。

一方、アニミズム的文化に育まれた、日本人の意識では、動物との断絶感もなく、「人間」が日本画の主役となることも、稀れであった。そこでは人間は、あくまで点景の一つであるに止どまり、その描写も非個性的・**非人格**的である。これに引きかえ、泰西絵画では、**個人**が主役である。のみならず「個人」ないし「個人名」は、時間を超えて生きている。ヨーロッパの広場や公園に、次々と姿を現す女王・政治家・軍人・芸術家の彫像、カテドラル内の聖者・王者の像また像、はたまた「地名」「道路名」として、曰く「レニングラード、ド・ゴール広場、サン・マルコ広場、ワシントン、ケネディ空港…」(日本では、かつて誰かが言ったように、吉田茂空港とか新潟県角栄郡とかのアイディアは、あまり耳にしない)。ことばの終わりに、いちいち相手の名前を付する煩わしい習慣も、この精神的風土において、理解されねばならぬ。彼我における〈個人の人格の重み〉がまるで違うのだ。片や、この国では、「オ兄サン、電気屋サン、課長」のように「個人」は、その「親族名称・職業名・地位」など〈集団内での役割名称〉に取って代わられてしまう。これらはすべて、「個人」・「人格」を素通りした捉え方だ。ちなみに、「人格」とは「自由意志ないし自由への意志」の謂である<sup>いい</sup>。

ここで欧米人にとって〈個人名〉の持つ意味を鮮烈に示す、感動的な場面を紹介したい。演ずるは、故モナコ公国王妃、かつての女優グレース・ケリーである。

#### D-1

ジョージー「もし、あなたが、あの人を一人立ちさせておくことが出来て、その間に、私、あの人からのがれる事ができたら——その時には、私、あなたを許して上げられるかもしれないわ！ 私はただ、自

分の名前と、生活して行けるだけの職とさえあれば、何もいら  
ないの！」

Georgie : And I might forgive even you, Mr. Dodd—if you can keep him  
up long enough for me to get out from under : All I want is my own  
name and a modest job to buy sugar for my coffee !

〔喝采 (The Country Girl), 1954 年, アメリカ〕

欧米流の「個」意識は、周知の如く、「イエス」か「ノー」の明快な二分法 (dichotomy) 的思考に遺憾なく発揮される。この二分法ないしデジタル的思考も、さか上っては、遊牧・砂漠民族の通商 (取引) 関係 (買うか、買わないかの、二者択一の世界) におそらく、ルーツを求め得ようし、アラブ、南欧、地中海世界と、空気が透明で、ものの形のハッキリ出る風土とも関係があるだろうが、その点、日本的思考は、湿気の多い、風土的な影響のせい (美学的ないし政治的には、まさしく中間色ないし玉虫色を好むようだが)、総じて、灰色思考もしくはノン・デジタル的思考といえるであろう。「この際ハッキリ申しておきますが」が、敵対ないしケンカ口上となる国である。しかしながら、例えば交通信号が「青」でもなく「赤」でもない「中間色」では困るであろう。ちなみに彼の地では、男・女性歌手とも、異性の歌を歌うことはない (同じ曲でも、曲中の he と she を必ず入れかえて歌う)。この二分法も、日本人には通用しないようだ。

さて、この「イエス」と「ノー」の応答に関連して、「…ではないですか？」という否定問、に対する日本語の答え方は周知の如く、全く独自なものである。日本語では、質問者の問い方に即して答える。相手の予想に即している、と思えば「ハイ」を、予想に反している、と思えば「イイエ」を使う。ところが、英語に代表される西欧語では、質問者が、どのような問い方をしようと関係なく、答え手の答の内容に即して答える。即ち、答の内容が「…でない」時は常に「ノー」であり、「…である」時は常に「イエス」なのである。ここにも、日本人に顕著な〈相手に同調する〉傾向がうかがわれる

が、日・英いずれがヨリ consistent で、ヨリ logical であるか、わけても伝達上、ヨリ機能的であるかは、自明である。さらでだに、日本語の打消語は、文末まで現れず、聴く者を中ぶらりんにさせ、挙句の果てに、ドンデン返しを食わせたりする。「結論」は、(英語とは正反対に) 後へ後へと押しやられる。さきの「灰色思考」と併せ顧みて、私たち日本人には、徹底を忌み、物事を合理的に割り切らない所に、そして聖徳太子以来「和」する所(つまり非人格的・非個性的な生き方)に、むしろ価値(美や徳)を見出そうとする心情が、あるようである。[もっとも「和して同ぜず」の境地まで行けたら、いうことはない。]

以下に見る例は、日本語なら、その場の状況に応じて、人間以外の主語を設定するであろう場合に、人間中心主義の英語には、可能な限り「人間」を正面に(主格として、あるいは対象として)押し立てようとする、根強い傾向があることを、裏書きするものであろう。そしてその場合、人体の各部位などは、あまり気にならず、〈各個人それ自体〉に還元されてしまう点も、日本人とは異質な感覚である。(すべて、人称代名詞である点が重要なのであって、この場合その種類は、特別な意味を持ち得ないが、整理の都合上、第一人称～第三人称の順に見て行くこととする。)

### 〈第一人称〉

#### D-2 「パンが切れた。」

'We are out of bread.'

#### D-3 「まだ夜は長いわ。」

'We have all night.'

#### D-4 「左手は海です。」

'We have the sea on our left.'

#### D-5 「さて何があるかな？」

'Let's see what we have here.'

#### D-6 「ここはどこ？」

‘Where are we?’

D-7

エミィ「あのラミレスさん…ウィルと私とは、1時間前に結婚したばかりなんです。私たちはすっかり荷造りして発つばかりでした…」

Amy : Look, Mrs Ramirez… Will and I were married an hour ago. We were all packed and ready to leave, and then this thing happened, and he wouldn't go. I did everything. I pleaded. I threatened…

(注) we = our things

[真昼の決闘 (*High Noon*), 1952 年, アメリカ]

D-8

バジリー (闘争委員長)「大丈夫だぞ、諸君！ 条件が通った！ ストライキは解決して、我々は勝ったのだ！」

Badgeley : It is all right, men ! We have our terms ! The strike is settled and we have won !

[心の旅路 (*Random Harvest*), 1942 年, アメリカ]

D-9 「胃が痛い。」

‘I have a stomachache.’

D-10 「この電車は駅へ行きますか？」

‘Am I on the right car to the station ?’

D-11

マギー「(笑う) どこまで話してましたっけ？」

トリー「新婚早々のところ。」

マギー「彼とは別れたわ。このホノルルで…」

Maggie : (laughs) Where was I ?

Torrey : Just married.

Maggie : I left him, right here in Honolulu…

[危険な道 (*In Harm's Way*), 1965 年, アメリカ]



D-12

そのタオルは実に立派に見えたので、それが紙製であり、完全に手を拭きおわるまでには、四枚も使わなければならないことがわかった時は、実にびっくりした。

They looked such good towels that I had a shock when I discovered they were made of paper and I had to use four of them before I was completely dry.

D-13

ゼルダ 「ファスナーをしめてちょうだい。」

オービル 「(彼女のドレスの背部のファスナーをしめながら) どっかへ出かけるの?」

ゼルダ 「ええ、もう遅れてるの…」

Zelda : Zip me up, will you ?

Orville : Going somewhere ?

Zelda : Yes, and I'm late...

(ねえ、キスしてよ (*Kiss Me, Stupid*), 1964 年, アメリカ)

D-14

ブレイド 「チャプマンか誰か知らんが、ハッキリ言おう」

Braid : Chapman, or whatever your name is, Ill be blunt...

(注) I = My speech

(トリプルクロス (*Triple Cross*), 1967 年, アメリカ)

D-15 「私の言ウコト, よく聞いて。」

'Listen to me.'

D-16 「私のトコロにいらっしゃい。」

'Come to me.'

D-17 「私の声, 聞こえる? (電話口などで)」

'Can you hear me ?'

## D-18

アグネス「クララ、この半年の間に、あんたがパーマをかけてくれたの、3回よね。髪の毛の先が、みんな枝毛になっちゃったの。」

Agnes : Clara, you've given me three permanents in the last six months.

All my ends are splitting.

〔長く熱い夜 (*The Long, Hot Summer*), 1958 年, アメリカ〕

## 〈第二人称〉

## D-19

「はい、これ。(探している物・望みの物を差し出しながら)」

'Here you are.' (アナタノ求メルモノハココニアル)

D-20 「空いている部屋がありますか？」

'Have you any rooms free ?'

## D-21

「小さじに 2 杯の塩と、1 杯の砂糖と、コショウを少し、ニンニクの粉を少しと、料理用のワインと、マーガリンを入れて、弱い火の上に 1 時間かけておきなさい。」

「わァ！ お母さんがあんまり速くおっしゃったので、途中でわからなくなっちゃったわ。」

—Put in two small spoonfuls of salt, one of sugar, a pinch of pepper, a dash of garlic powder, cooking wine, margarine, and let it sit over a low fire for an hour.

—Gosh ! Yor went so fast, I got lost.

(注) you = your speech

## D-22

(音楽教授が一心にバイオリンの修業をしている若者に)

「週に 2 回ずつ君のバイオリンを弾くのをきいて上げよう。」

'I will hear you twice a week.'

〈第三人称〉

D-23 「彼のいう通りだ。 (彼のコトバは正しい)」

'He is right.'

D-24 彼は詩を書いたが、 それが活字になったことは、 ついぞ無かった。

He wrote poetry, but he never got published.

D-25 「ソラ、 また (いつものクセが) 始まったぞ。」

'Now he goes again.'

D-26

医師「最も必要な白血球と血小板を補給している。」

Dr. Addison : She's getting white cells and platelets, which at the moment is the most important thing that she needs.

[ある愛の詩 (Love Story), 1970 年, アメリカ]

D-27

「彼の資産はどの位ありますか？」

「だいたいの見当で、少なくとも 100 万ドルというところでしょうな。」

—'What's he worth now ?'

—'At least a million is my rough guess.'

D-28

キャロウェイ「同行願わねば、シュミットさん…」

マーチンズ 「(彼女に) 手錠はしないのかね？」

Calloway : You'll have to come with us... Miss Schmidt.

Martins : You're not locking her up ?

[第三の男 (The Third Man), 1952 年, イギリス]

D-29

医師 「どうやって、 この子の歌をやめさせるかね？」

スーイン 「(広東語で) 歌を止めなさい。」

Dr. Keith : How do you turn her off ?

Suyin : (in Cantonese) Be quiet, dear.

[慕情 (*Love Is a Many-Splendored Thing*), 1955 年, アメリカ]

### D-30

「サリー (赤ん坊) のオシメを変えてくれませんか？」

‘Will you change Sally ?’

なお、前出の A-1, 2 ; B-15, 21, 22, 23 ; C-5, 9, 12, 13, 14, 19, 20, 21, 22, 23, 24 等は、本節 (D 型) の例文としても考えられる。このように、「D 型が、ABC 型ソレゾレに通ずるものを持つ」ということは、現実の英文 (表層構造) は、われわれが分析・抽出した《四つの基本的発想パターン (基層構造) 》を組み合せ、ないし複合して構築・表象されたものだ、ということを示すものといえる。

### む す び

日本人は、自然や時間に対して常に消極的・受動的である。もともと「自然」という固有の日本語は、なかったのだ。「おのずから、しかるもの」は、対象化され、概念化されることがなかったわけで、人間は、自然とは対立せず、自然の中に融け込んでいた。また一方、「時間」は、いわば無限から無限へと流れる大河の如きもの、しょせん、人間の意志と存在を超えたもの、として捉えられている気配がある。

ところが一方、ヨーロッパ人にとって「自然」とは、飼いならし、積極的に自らの手で創り出すべきもの、そして「時間」とは、自ら主体的にコントロールすべきものなのであった。何と「人間中心的」であろうか。木村尚三郎氏 (西洋史) によれば (『元号と日本人の時間意識』)、彼らは長い間、一人一人が人生を意志的・計画的に生きてきた。つまり彼らは、それぞれ異なった時間の世界を持ち、その時間を常に生と死においてとらえてきた。かくて、キリスト生誕から最後の審判にいたる、「初めと終わり」のはっきりした、有限の、西暦による大きなキリスト教的時間世界の中で、一人一人が、その小時間世界を個性的に持ちつづけ、大小 2 つの有限の時間世界に生きてき

たのである、と。さればこそ、彼らは、自分の誕生日をいつまでも忘れることなく祝い、他人の年齢（や他人の目）が気になってならない私たち、とは打って変わって、人の年など「我関せず焉」と泰然たり得る。新聞・テレビのニュースに出る人名に、年齢を付記しない習慣も、うなずけよう。「人は人、自分は自分」というわけだ。そしてその端的な表現が、かの“I couldn't care less.”であろうか。

他方、自然に対し、時間に対し、受動的・肯定的な日本人は当然、現実コミットしようという歴史的主体の意識が弱い。常に「待ち」の姿勢にあって「行動」するのは、やむを得ざる必要悪としてである。日本人にとって「歴史」は、非人格的な大きな流れの「いきほひ」——「つぎつぎになりゆくいきほひ」——として実感されているのである（丸山真男氏「歴史意識の“古層”」）。このような、いわば今日に生きる、しかも狭小な、直接接触的（タンジブル）な集団の世界に生きる、スタティックな状態思考型・現実肯定主義の日本人と対比的に、常に明日の世界（理念）に生き、創造ないし行動に生きる欧米人、この両者のコントラストは、まさしく〈行動的—非行動的〉の対立として捉えることができよう。「現実」に対する彼我の、この対照的なメンタリティは、日本人（海外旅行者）のカメラ（スナップ写真）好きと欧米人（旅行者）の「8ミリ」愛好に、はしなくもその一斑を顕わす。もっとも、グローバルな世界になりつつある近頃は、お互い歩み寄る形勢にはある。ついでながら、音声学的に、英語のダイナミックな強弱リズムは、〈機関銃ないし大砲型〉で、他方、日本語のそれは平板・単調、そして、のどかな抑揚をもつ〈小銃型〉リズムであることも面白い符合である。

ところで、相手に失礼だ、としてアイ・コンタクト（視線が合うこと）を避ける日本人の眼は、上か下（あるいは閉眼）に行かざるを得ぬ（植物的かつ詠嘆的！）。他方、自己防衛的な〔より根源的には、ゲルマン時代以来の自力救済（Selbsthilfe）原理に生きてきた〕西欧人は、敵を〈水平〉に直視（観察）し、相手の動向に敏感に、ぬかりなく反応するだろう。あたかも獲物をねらう動物のように。

かく見來たる時、ここに抽出した、欧米人・対・日本人の〈行動的—非行動的〉〈動物的一植物的〉つまりは〈動的一静的〉なる図式——この対照的な彼我のメンタリティ——は、われわれが、日英表現の対比を通して探索し、確認した「日英語についての四つの対立的・発想パタン」および、これらの発想形式を貫く「英語と日本語の論理ないし心」と奇しくも対応する。それと言うのも、

- A 自律的・能動型(英) —— 他律的・受動型(日)
- B 肯定的・積極型(英) —— 否定的・消極型(日)
- C 客観的・分析型(英) —— 主観的・省略型(日)
- D 人格的・人間中心型(英) —— 非人格的・環境依存型(日)

の諸対立も、つまるところ、〈剛と柔〉ないし〈陽と陰〉のコントラストとして総括できそうに思えるからである。

思い至れば、さもありなんと思われる。自然的諸条件や歴史的伝統に培われた物の見方・考え方の個性、つまりメンタリティは、当該文化の創造ないし形成に与ったメディアの最たる言語に、その影を色濃く、刻印ないし反映せざるを得なかったと推論できるからだ。然り、副題の「英語の心と日本語の心」、その「心」(ないし「エトス」)はそれぞれ対置的に、前者(英語の心)は正に〈男性〉(より正確には「父性原理」)のものであり、後者(日本語の心)は実にも、〈女性〉(より正確には「母性原理」)のものである。

#### 〔参考文献〕

- |                                       |               |
|---------------------------------------|---------------|
| 1. Carpetbaggers, The (大いなる野望)        | 1965-6 時事英語研究 |
| 2. Catch 22 (キャッチ 22)                 | 1971-11 〃     |
| 3. Country Girl, The (喝采)             | 1955-5 〃      |
| 4. Dial M for Murder (殺人にはダイヤル M を廻せ) | 1954-9 時事英語研究 |
| 5. Diamonds Are Forever (ダイヤモンドは永遠)   | 1972-2 スクリーン  |
| 6. East of Eden (エデンの東)               | 1964-1 南雲堂    |
| 7. Fahrenheit 451 (華氏 451)            | 1968-1 時事英語研究 |
| 8. For a Few Dollars More (夕陽のガンマン)   | 1967-4 スクリーン  |

- |   |                          |
|---|--------------------------|
| 9. For Whom the Bell Tolls (誰が為に鐘は鳴る)                               | 1964-9 南雲堂               |
| 10. Giants (ジャイアンツ)   | 1957-2 時事英語研究            |
| 11. Go-Between, The (恋)   | 1972-2 〃                 |
| 12. Go Naked In the World (蒼い渚)                                     | 1961-8 〃                 |
| 13. Great Lie, The (偉大な嘘)   | 1948-9 沙羅書房              |
| 14. High Noon (ハイ・ヌーン)  | 1963-7 南雲堂               |
| 15. Imitation of Life (悲しみは空の彼方に)                                   | 1959-6 時事英語研究            |
| 16. In Harm's Way (危険な道)  | 1965-9 〃                 |
| 17. Kiss Me, Stupid (ねえ! キスしてよ)                                     | 1965-5 〃                 |
| 18. Long, Hot Summer, The (長く熱い夜)                                   | 1965-7 〃                 |
| 19. Love Is a Many-Splendored Thing (慕情)                            | 1965-12 南雲堂              |
| 20. Love Story (ある愛の詩)  | 1971-10 バラマウント<br>社スクリプト |
| 21. Peyton Place (青春物語)   | 1958-4 時事英語研究            |
| 22. Pride of the Yankees (打撃王)                                      | 1949-3 国際出版社             |
| 23. Proud Ones, The (誇り高き男)   | 1964-12 南雲堂              |
| 24. Random Harvest (心の旅路)   | 1947-7 世界文庫              |
| 25. Rear Window (裏窓)  | 1955-1 国際出版社             |
| 26. Road to Hong Kong, The (ミサイル珍道中)                                | 1962-10 時事英語研究           |
| 27. Russians Are Coming, The Russians Are Coming,<br>The (アメリカ上陸作戦) | 1967-1 時事英語研究            |
| 28. Summer of '42, The (おもいで夏)                                      | 1971-11 スクリーン            |
| 29. Sunday in New York (ニューヨークの休日)                                  | 1964-6 時事英語研究            |
| 30. Third Man, The (第三の男)   | 1963-11 南雲堂              |
| 31. Thomas Crown Affair, The (華麗なる賭け)                               | 1968-8 スクリーン             |
| 32. When Eight Bells Toll (八点鐘が鳴るとき)                                | 1972-1 時事英語研究            |
| 33. Wuthering Heights (嵐が丘)   | 1966-4 南雲堂               |

#### 〈付記〉

本稿は、「英語の心と日本語の心——日・英語発想の諸形式——」と題して(月刊誌)『英語教育』『特集: 英語教育における基本認識・英語教育資料』(大修館, 1980年9月増刊号)に掲載された論文であるが, その今日的意義にかんがみ, 今回, 資料の記述に補正(映画の邦題名と年代を追加)を施し, 標題名を含め, 適宜, 加除訂正の上, 正確を期したつもりである。